『元朝秘史』におけるデイ・セチェン
～デイ・セチェンがイェスゲイ・バアトルの死に関与していたという仮説に基づいて～
Dei sečen in the *Secret History of the Mongols*：On a Hypothesis that Dei sečen was involved in Yisügei Ba'atur's death

藤井真湖
Mako Fujii

Abstract

The story of Chinggis Khan's marriage to Qongirad's Dei sečen's daughter Börte as his wife is described in Volume 1 §§61-66 of the *Secret History of the Mongols* (hereafter the SHM).The Qonggirad group is also referred to as Qonggirad, Onggirad, and Unggirad, but in this paper, they are unified into one term as Qonggirad. According to the SHM's narrative, the marriage was set up by Chinggis' father Yisügei in his lifetime. Yisügei happens to meet Dei sečen, the elder of the Qongirad group, while trying to marry his son Temüjin (later Chinggis Khan) from his wife Ö'elün's group Olqunu'ud. He is then taken to his house at the strong recommendation of Dei sečen and introduced to his daughter Börte. Yisügei approves of Dei sečen's daughter Börte and decides to make her the wife of Temüjin.

It can be said that the relationship between Yisügei and Dei sečen has been considered to be good. This is because the marriage of their children has been established between Yisügei and Dei sečen, and Chinggis later actually welcomed Börte as his wife (Volume 2, §94). However, there are many mysteries about the relationship between the two. In this paper, I would like to raise a hypothesis that Dei sečen was actually an enemy of Yisügei and involved in Yisügei's death. Based on this hypothesis, I would like to show that tracing the relationship between Dei sečen and Yisügei in the text reveals an explicit mystery.

キーワード

デイ・セチェン，イェスゲイ・バアトル，テムジン（チンギス・カン），ボルテ

はじめに—モンゴル英雄叙事詩としての『元朝秘史』

『元朝秘史』は主にモンゴル帝国の創始者チンギス・カンの事績が綴られた歴史的文学作品である。当該文書は英雄叙事詩とは異なり口頭で伝承されたことはなかったものの、文書の構造においてはモンゴル英雄叙事詩と共通した性質が認められる。その性質とは、『元朝秘史』（以下、秘史）においては明示的に語られている内容とは正反対の内容が「隠されている」ということである。特に秘史に隠された内容（＝非明示的内容）は、明示的内容と正反対である点で、モンゴル英雄叙事に通じる特徴があることが観察される。筆者は秘史のこの特徴を重視し、秘史を“英雄叙事詩”として扱ってきた。言うまでもなく、長らく口頭伝承として存在してきたモンゴル英雄叙事詩の語りには歴史的な人物が明示的に登場しないという点で、秘史は“英雄叙事詩”とは明らかに異なっている。明示的な内容の観点からみても、英雄叙事詩の内容は形式化されており、秘史の複雑さに遠く及ばないことも事実である。

秘史の英雄叙事詩性については実は20世紀のすでに前半期に著名なモンゴリストであるB.Y.ウラディミルツォフは秘史を“草原の英雄叙事詩”と称していたが、この表現はあくまでも比喩的なものでありその域を超えてはいなかったといえる[1]。チンギス・カンが直接登場する秘史というのは、モ

[1] B.Y.ウラディミルツォフは主にオイラト（西モンゴル）諸族の英雄叙事詩を研究していたため、オイラト英雄叙事詩に頻出する「第二の英雄」と彼が呼ぶところの人物形象に関心があった。「第二の英雄」というのは、

ンゴル英雄叙事詩の“元型なるもの”を考えるうえで有益だと思われる。なぜならモンゴル英雄叙事詩の深奥においては、チンギス・カンの系譜を引く王権への肯定と否定という両義性を非明示的に含んでいると考えられるからである（藤井　1998,2001）。

秘史には隠喩が複雑に埋め込まれていることについては拙稿で積み重ね論じてきたので詳細はそちらに譲るが（藤井　2013 他）[2]、とくに注目してきたことの一つはチンギス・カンの系譜に関連する婚姻の問題である。すなわち、チンギスの系譜の直接的な源となっているボドンチャルの婚姻やチンギスの父イェスゲイ・バアトルの婚姻の問題に焦点を当ててきた[3]。本論はこの婚姻における問題を拙稿で論じてきた考察の延長で論じるものである。すなわち、チンギスと、彼の正妻となったボルテとの婚姻プロセスに焦点を当ててこの婚姻における問題を論じる。

１．１　本論の目的－イェスゲイとデイ・セチェンの関係性における不可解な点をもとに－

チンギス・カン（以下、チンギス）がコンギラトのデイ・セチェンの娘ボルテを正妻として娶ったいきさつは秘史の巻１§§61~66 に叙述されている。コンギラト集団はホンギラト，オンギラト，ウンギラトとも表記されるが本論ではコンギラトで統一してある。秘史の叙述に従えば、この婚姻はチンギスの父イェスゲイが生前にお膳立てしたものである。イェスゲイは息子テムジン（後のチンギス・カン）に妻ホエルンの集団オルクヌウトから嫁をめとろうとした途上、コンギラト集団の長老のデイ・セチェンに偶然に出会う。彼はデイ・セチェンの強い薦めで彼の家に案内され、彼の娘ボルテを紹介される。イェスゲイはデイ・セチェンの娘ボルテを気に入り彼女をそのままテムジンの妻にすることを決める。

秘史におけるイェスゲイとデイ・セチェンの関係性はこれまで良好なものと考えられてきたといえる。なぜなら、イェスゲイとデイ・セチェンの間で彼らの子供たちの婚姻関係が成立していること、そして後にチンギスが実際にボルテを正妻として迎えていることからである（巻 2　§94）。しかし、両者の関係性については不可解な点も多い。その一つは、①イェスゲイがデイ・セチェンのもとからの帰途にタタル集団の宴会で毒を盛られ、家路についた後、デイ・セチェンのもとからテムジンを連れ戻すように家臣ムンリクに命じているからである。もう一つには、②そのムンリクがデイ・セチェンのところに行ってテムジンを連れ戻すのであるが、その際にデイ・セチェンには「イェスゲイが息子を恋しがっている」というような虚偽の理由を述べてテムジンを連れ戻していることである。イェスゲイとデイ・セチェン二人の関係性が真に良好なものであれば、この 2 点は不可解なものとしかいいようがない。これ以外にも、二人の関係性には直接関連しないように見えるが、③デイ・セチェンが自分の見た夢をデイ・セチェンが「吉兆」としてイェスゲイとテムジンに語っていることも不可解な点である。なぜなら、モンゴルの「伝統的」慣習においては良い夢を人には語らないからである[4]。

オイラト英雄叙事詩において主人公と好敵手であるものの主人公と闘って敗北した後は主人公の仲間となる勇者のことを指す。形象の独自性という点で、ウラディミルツォフは主人公と「第二の英雄」には機能的に差異がないという重要な指摘をしていた。すなわち、オイラト英雄叙事詩において登場してくる「第二の英雄」という形象がいかなる歴史的事情で成立してきたのかを知るには、「第二の英雄」の元型ともいえる秘史のチンギス・カンのライバルであるジャムカが歴史的にいかなる意味で真にチンギスの好敵手であったのかの理由を検討する必要があるということを主張した。彼はこの不可思議なオイラト英雄叙事詩の「第二の英雄」の淵源をジャムカに求めていた［Владимирцов　1971：46-47］。

[2] 拙論の最初の 7 つの論文については簡単な要約がある（藤井　2013）。続く 4 論文の要約は「“モンゴル英雄叙事詩”から見た『元朝秘史』－イェスゲイ時代とチンギス時代初期における非明示的集団間関係を中心に―」『チョイジ先生記念論集』に記したが未刊である。それゆえ、その他は各拙稿を参照されたい。

[3] ボドンチャルの婚姻については(Fujii 2019 :31-45)を参照。

[4] 秘史のこの箇所は少なくとも 17 世紀には理解されなくなったようで、秘史と約 8 割内容が重複しているロブサンダンジンの『アルタン・トプチ』においてこの箇所が修正されている（Чоймаа　2002：26）。Чоймаа 氏は秘史と『アルタン・トプチ』とを比較対照した箇所において否定の ülü が秘史にもあったと脚注 71 で述べている。すなわち、『アルタン・トプチ』と同様、ülü　ügülen「言わずに」を想定している。

本論ではイェスゲイやムンリクのデイ・セチェンに対する振舞い方を意味あるものとみなし、デイ・セチェンが実はイェスゲイの敵であり、密かにタタル集団と内通していたという仮説を提起してみたい。そしてこの仮説に基づいて、デイ・セチェンとイェスゲイの関係をテキストの中でたどると、明示的に不可解な点が解けてくることを示してみたい。

１．２　議論の流れ

本論においては、１．３で対象文献、１．４で方法論を示した後、デイ・セチェンの出現する箇所が２つの箇所に偏っていることを指摘し、ひとつめの箇所である巻１§61～巻 2§69 を区分 A、もうひとつの箇所である巻２§94 を区分Ｂとして、それぞれを２．および３．で考察する。２．においては、まず２．１で本論の仮説に抵触するようなデイ・セチェンのイェスゲイへの“クダ（縁者）よ”という呼び掛けの非明示的意味を探る。続く２．２においてはデイ・セチェンがタタル集団と内通していた可能性を、１）秘史に言及されている彼らの居場所をを示す目印となる地名、２）彼ら両集団のイェスゲイに対する関係性の共通性、３）「コンギラトの乙女が皇帝の正妻になってきた」というデイ・セチェンの主張における非明示的レベルの読み解き、４）デイ・セチェンのみた夢の非明示的レベルの読み解き、そして５）「テムジンは犬を怖がるので怖がらせないように」というイェスゲイのデイ・セチェンへの依頼が示す非明示的意味、という５つの観点から考察する。これらの議論を２．３で小括としてまとめておく。

続く３．においては区分Ｂを対象に考察を進める。具体的には、３．１で§94 の概要を示し、重要な論点となる箇所を５つに絞り、それぞれについて考察する。これらの考察についても３．２で小括として示しておく。最後に、結論を述べる。

１．３ 対象文献

四部叢刊本の続集二巻を含めた計十二巻を便宜上「ひとつの作品」とみなし、この総体を対象とする。秘史の編集過程においては多くの説があるが、現在のところ、敢えて連続体のものとして扱うということである。筆者の秘史研究においては、原文の音訳漢字をローマ字転写するさいには、四部叢刊本を定本として編まれた栗林均・确精扎布編『元朝秘史』モンゴル語全単語・語尾索引』（2001 年）に依拠している。訳語に関しては、小沢重男の『元朝秘史全釈』3 巻と『元朝秘史全釈続攷』3 巻（1984～1989 年）及び岩波文庫の『元朝秘史』上下巻（1997 年）を参照にしている。

１．４　方法論

テキスト読解の方法論は、フランスの構造・記号学者ロラン・バルト（Roland Barthes）が「物語の構造分析序説」で示した構造分析枠組みにもとづいている（ロラン・バルト 1979〔1977〕: 1－54)。この方法論は、歴史学における方法論とは異質なものである。歴史学においては言語を現実に生起した事象を反映している―反映の際のイデオロギー的歪みをある程度は認めてもいる―とみるが、筆者の採っている言語観は構造主義的立場に立つものであるため、 言語は現実の反映でなく“言語＝世界”いう見方を採る。言語観のこうした差異は当然ながら秘史の読解に多くの差異を生み出すことになる。すなわち、書かれていても、実際に生起したかどうかはわからない。

本論の方法論に基づくと、書かれていないことは存在しないことになるので、その観点からみるとその叙述された断片をつなぐ論理は複数ある。それゆえ一連の関連箇所においての仮説が妥当だとしても、それが真に妥当性を持ちうるのかはまた別の問題である。この観点から、拙論においてはある特定の範囲で整合性を持つ仮説が他の箇所においても整合的であることを積み重ねていくことによって個々の仮説の総体的な妥当性を高めていくという方法を採っている。

２．考察その１－区分Ａの考察―

本論の仮説の妥当性を提示するため、まずは秘史におけるデイ・セチェンの出現箇所をすべて検討に付すことにする。デイ・セチェンの出現箇所をすべて列挙すると表１となる。表１では当該箇所の概要も付しておいた。表１をみると、デイ・セチェンの出現箇所は計 11 回あるが、その出現の

箇所をみると明らかに２つの箇所に集中していることが観察される。すなわち、１～７番までは各出現箇所の間が１～３節という短い開き具合になっているのに対して、7 番と 8 番の間には 25 節もの開きがあるのである。そして、8 番以降最後の事例までの 4 例はすべて巻 2§94 に現れている。

この事実を反映して、表１においては２つの箇所をそれぞれ区分 A、区分 B と分けて記しておく。ところで、区分 A の事例はすべて§61～§69 に収まっているが、このうちの幾つかの節にはデイ・セチェンの名前は現われない。しかし、デイ・セチェンの名前が登場していなくても一連の節は考察に関連するので、これらのデイ・セチェンが登場していない節も概要がわかるように挿入しておいた。この２．の考察においては区分 A を、続く３．においては区分 B を、それぞれ論じることにしたい。

表１：秘史におけるデイ・セチェンの出現箇所

区分	番号	出現形式	出現箇所	巻と節	概要
A	1	Dei_sečen-ni	01：42：05	巻 1 §61	イェスゲイの前に突然現れる。
	2	Dei_sečen	01：42：08	巻 1 §62	イェスゲイの来意を尋ねる。
	3	Dei_sečen	01：43：01	〃	イェスゲイの息子を褒める
	デイ・セチェンの言葉			巻 1 §63	海青（大鷹）が太陽と月を掴んで腕にとまった夢をイェスゲイに語る。
	デイ・セチェンの言葉			巻 1§64	コンギラトが皇帝の正妻を輩出してきた集団であることをイェスゲイに主張する。
	4	Dei_sečen	01：45：09	巻 1 §65	イェスゲイを自分の家に連れていく。
	5	Dei_sečen	01：46：06	巻 1§66	娘ボルテをテムジンに与えることをイェスゲイに承諾し、テムジンを婿として置いていくように言う。
				巻 1§67	イェスゲイがタタルの宴会に立ち寄り毒を盛られる。
				巻 1§67	イェスゲイがテムジンを連れ帰るようムンリクに遺言し亡くなる。
	6	Dei_sečen-ne	02：01：03	巻 2§69	ムンリクがデイ・セチェンのもとに行き、テムジンを連れ帰るようにイェスゲイに命じられた旨を伝える。
	7	Dei_sečen	02：01：04	〃	デイ・セチェンがテムジンに早く戻ってくるように言う。
B	8	Dei_sečen	02：36：06	巻 2§94	テムジンがデイ・セチェンのもとに行き、ボルテを妻として連れ帰る。
	9 10	Dei_sečen	02：36：09 2 回出現	〃	
	11	Dei_sečen	02：37：03	〃	

２．１　デイ・セチェンによる“クダ（縁者）よ”という呼び掛けの非明示的意味

上記の要約のように、イェスゲイは息子テムジン（後のチンギス・カン）に妻ホエルンの実家オルクヌウト集団から嫁を求めようとした途上、コンギラト集団の長老のデイ・セチェンに出逢い、オルクヌウトには行かずそのままデイ・セチェンの家に導かれ彼の娘ボルテを紹介される。イェスゲイはデイ・セチェンの娘ボルテを気に入りそのままテムジンの妻にすることを決める。この部分だけを見る限り、不自然なところはないように見える。

しかしイェスゲイ自身がホエルンを妻とした経緯を考慮に入れると、イェスゲイがホエルンの家から嫁を求めるというのは無理筋のように見える。イェスゲイはホエルンを略奪でメルキドのチレドという人物から奪ったことが巻１§§54~56 で叙述されているからである。ホエルンはメルキドのチレドに嫁ぐはずであったのに、イェスゲイに略奪されたわけである。秘史の明示的流れを見る限

り、ホエルンの実家がこの略奪を事前に知らされていたという叙述はない[5]。ホエルンが略奪によってイェスゲイの妻になったことを重視するなら、ホエルンの実家からみればイェスゲイという人物は娘の縁談を台無しにした人間なはずである。それゆえ、イェスゲイがホエルンの実家から息子の嫁をめとろうというのは厚顔無恥な行為と映った可能性は高い。

むろん、イェスゲイはホエルンを略奪した後、息子テムジンに嫁をめとるまでにホエルンの実家と和解した可能性はあるが、ここでは採らない。その理由は、これまで拙論で積み重ねて議論からみると整合性がないからである（１．４の方法論を参照）[6]。イェスゲイがホエルンの実家と和解が成立していない場合、イェスゲイはどのような目算があってホエルンの実家のあるオルクヌウト集団に向かったのであろうか。この点に関していえば、イェスゲイ自身も実は確信を持っていなかった可能性があると考える。

この可能性を傍証しているように思われるのは巻１§62 である。そこにおいてはデイ・セチェンが初対面から“イェスゲイ・クダ（縁者）よ”と呼び掛けている。“クダ（縁者）”とは、姻戚関係にある集団の父同士がお互いに呼び合う呼称である。デイ・セチェンのこの呼び掛けはホエルンの実家の属しているオルクヌウトがイェスゲイのことを“婿”だと承認していることを示している。イェスゲイはデイ・セチェンのこの“クダ（縁者）”という呼び掛けにより、彼自身がオルクヌウトから“婿として承認されていた”ことを知ったのだと考える。イェスゲイはその承認に安堵の念を覚え、妻の実家から息子の嫁を娶るために来たことをデイ・セチェンに素直に伝えたということになる。

ところで、秘史にはオルクヌウトがデイ・セチェンの属するコンギラト集団の下位集団であることは一度も触れられていない。しかし、上記のデイ・セチェンがイェスゲイに“クダ”と呼び掛けることによって、コンギラトとオルクヌウトと同族であることが間接的に示されているといえる[7]。

デイ・セチェンがイェスゲイの敵であったと本論では仮定しているが、その理由は明示的に叙述されている事件、すなわち、イェスゲイがメルキト集団のチレドからホエルンを奪った事件に求め

---

[5] 村上正二氏はイェスゲイのホエルン略奪についての正当性の論理を提供している（村上　1970：72）。詳細は注６を参照のこと。

[6] イェスゲイのホエルンを略奪した経緯についての合理的説明として村上正二は『モンゴル秘史１』で次のような注釈を付している（村上　1970：72）。おおむねこの意見が研究者によって支持されてきたと思われるので引用しておきたい。ただし、下記の引用中の（１）と（２）は筆者が付加したものである。

ここはイェスゲイが、後にチンギス・カンの母となった妻のホエルンを略奪してくる有名な説話で、諸学者によって、モンゴル族に略奪婚の習俗があった有力な証拠にあげられるものである。だが注意しておきたいことは、ホエルンはモンゴル族の通婚族として、（１）常にモンゴルと娘を交換する間柄にあったコンギラト族の一分派のオルクヌウト氏出身の女性であり、もともとモンゴル族の男性に嫁す運命にあったものである。にもかかわらず、当時モンゴルとは敵国の関係にあったメルキト族が、（２）己が姻族と新たに婚姻関係を結ぶことは、モンゴル族にとっては忍びないところであり、したがってこれに襲撃を加えて花嫁を略奪し去ることは、むしろモンゴル族の既得権の当然の行使と見られぬこともないのであろう。

上記の（１）については拙稿で考察したように、ホエルンがすでにメルキドのチレドとの間に一子を設けていたということを考慮に入れるならば、該当しない事柄である（藤井　2020：29－54）。

また、（２）についてもイェスゲイがホエルンを正式なやり方ではなく略奪した背景には彼が既にタタル集団から正妻－秘史においては“ベルグテイの母”とのみ呼ばれている―を娶っていたからだとする拙論からみると該当しないことである（藤井　2010）。

[7] 村上正二はラシードの所伝を引いて、オルクヌウトについては、モンゴル部族の通婚部族たるオンギラト（本論ではコンギラト　―藤井注）集団を構成する六つの重要なる氏集団の一つであると注釈している（村上 1970：73）。また、オンギラトについては、「この大きい部族集団の牧地は、北はアルグン河の流域から南はタタル族または金国の疆域に接し、西はフルン・ブユル湖、東は嫩江近くまで広がっていたものらしい」と居住区についても記している（村上　1970：84）。とはいえ、秘史においてはコンギラトを代表する長老のようにイェスゲイに対して振舞っているが、村上はデイ・セチェンの出自については『元史』の「特薛禅伝」を引き、姓は「孛速忽児」とあり、Bosqa’ūl>Bosqūl でモンゴル語で「背反者」の意があると注釈している（村上 1970：85）。

ている。ホエルンの出身集団であるオルクヌウトに到着する前にデイ・セチェンと出くわしたという叙述を見ると、ホエルンの実家であるオルクヌウト集団では、おそらく前もってイェスゲイが息子を連れてやってくることを知っていて、この事態にどう対処するかについてデイ（大）・セチェン（賢者）に相談していたのではないかと考える。たとえイェスゲイ親子がやって来ることが事前に知らされていたとしても、前述のように、オルクヌウト側としては、ホエルンを不法に奪われたにもかかわらず、イェスゲイが自分の息子の嫁を求めに来るという人間にどのように対応するべきか途方に暮れていたのではなかろうか。この相談を受けて、デイ・セチェンはイェスゲイ親子がホエルンの実家にたどり着く前に遭うために待ち伏せしていたと考えられる[8]。デイ・セチェンは明示的には偶然にイェスゲイに出会ったかのように読めるのであるが、実際には待ち伏せしていたのである。彼はデイ（大）・セチェン（賢者）であるから、イェスゲイに警戒されないように、彼に“クダ（縁者）よ”と声を掛けたのであろう。デイ・セチェンの予期した通り、イェスゲイはデイ・セチェンに警戒心を解いて来意を告げたということになる。

それでは、デイ・セチェンはイェスゲイに会ってどうするつもりであったのであろうか。デイ・セチェンの行動を見ると、彼はイェスゲイの息子テムジンと自分の娘ボルテとの婚姻の約束をしてから、テムジンを自分のもとに「婿として」置いていくようにイェスゲイに言い、イェスゲイを帰宅させた後、テムジンを自分の家に残させている。このことからみて、デイ・セチェンは婚姻という名のもとに、テムジンをいわば“人質”に取ったということになる。デイ・セチェンの意図は、テムジンがイェスゲイのような婚姻秩序を破壊するような存在に将来的になることを防ぎ、少なくともイェスゲイの息子を社会的な危険分子である父イェスゲイから分離させるところにあったと考える。

イェスゲイ親子の分離に留まらず、デイ・セチェンのイェスゲイへの不信は徹底したもので、彼はイェスゲイを彼の対応の仕方によっては亡き者にすることも視野に入れていたのではないかと考える。そして、そのために利害が一致するタタルと手を組んだと推測する。次の節においては、デイ・セチェンがオルクヌウトと密かに通じていただけではなく、タタル集団と通じていた可能性を指摘したい。

２．２　タタル集団と通じていたと考えられるデイ・セチェン

２．２．１　秘史で言及されるデイ・セチェンの居住地名とタタル集団の居住地名

デイ・セチェンはなぜタタル集団と通じていたと言えるのであろうか。その痕跡をテキストを基に見てみることにしたい。デイ・セチェンがイェスゲイの前に現れる場所は、チェクチェル山とチクルグ山の２つの山の間だと記されている。その箇所である§61 においては簡潔に次のように叙述されている（栗林均・确精扎布　2001：46 ）。

öṭ=ḳui-ṭur Čekčer Čiqurgu qoyar-un ǰa’ura Onggiradai Dei_sečen-ni ǰolqa=ba.
〔イェスゲイが〕進んでいくと、チェクチェルとチクルグの間でコンギラトのデイ・セチェン（大賢者）に遭った。

そして、２つの山の名前のうち１つチェクチェルは、実は、イェスゲイがデイ・セチェンのところからの帰途に立ち寄ったタタル集団と出逢った場所、すなわち毒を盛られた場所なのである。チェクチェルという名前は§67 に次のように記されている（栗林均・确精扎布　2001：52）。

---

[8] 松田孝一氏は「オルジャ河の戦い」の 2 年後の承安 3 年（1198 年）時のボスフル―デイ・セチェンの出自集団（藤井注）－についての考察のなかで『金史』巻 93、宗浩伝を引きつつ、金側に近いところから、コンギラト、ボスフル、サルジュートの勢力が位置し、ツプ（タタル）はそれより遠い位置にあったと指摘している（松田　2015：36）。秘史とは異なり、『金史』においてはコンギラトとボスフルは別の集団として扱われているが、オルクヌウトをコンギラトの下位集団と考えれば、イェスゲイがオルクヌウト集団の居住地にたどり着く前に、ボスフルに属するデイ・セチェンに出遭っていることは松田氏の諸集団の地理的位置関係についての考察と符合している。

Yisügei_ba’atur ǰa’ura Čekčer-ün Šira_ke’er-e Tatar_irgen qurimla=n bü=küi-ṭur ǰolqa=ǰu
イェスゲイ・バアトルは途中、チェクチェルのシラ・ケエルでタタルの民が宴を催しているのに出逢って

以上のように、デイ・セチェンがイェスゲイと出逢った場所と、イェスゲイが敵であるタタル集団に出逢った場所は異なるものの、同じくチェクチェルという地名が彼らのいる場所を示す目印として用いられている。このように、デイ・セチェンとタタル集団の居住地域を示す地理的名称の一部が一致していることは、彼らの関係性を暗示するものとなっていると考える。それだけでなく、デイ・セチェンの集団とタタル集団にはさらに重要な共通点があった。それは彼らにはイェスゲイの属する集団と婚姻関係があったことである。これについては次節において考察したい。

２．２．２　コンギラト集団とタタル集団の共通性

コンギラト集団とタタル集団はイェスゲイの属する集団に対して共通した点として婚姻関係があると述べたが、タタル集団がどのようにイェスゲイと婚姻関係にあったのかについては秘史に明示的には記されていない。それゆえ、以下、拙稿の内容をふまえて簡単に説明することにしたい。

秘史においてはイェスゲイにはホエルン以外にももう一人の妻がいたことが記されている。この人物－秘史において“ベルグテイの母”とのみ言及されている―は実は、イェスゲイはホエルンを略奪する前に、タタルから娶っていた正妻であった。この仮説はすでに拙論で詳細に議論したので詳細はそちらを参照されたい（藤井　2010：167－175，2011：23－31）。この仮説に基づくと、イェスゲイはタタルから正妻を娶っていたにも関わらず、その正妻を非正妻にして、他者から略奪したホエルンを正妻にしていたということになる。イェスゲイのこうした行為の背景にはクトゥラ・カアン政権の後釜を狙っていたことが関係していたと考えられる（藤井　2015：22）。クトゥラはアムバガイを陥れるためタタル、さらにば金朝と手を結んでいたため、アムバガイ死後に遂行せねばならなかった“アムバガイの弔い戦争”である対タタル戦において機能不全に陥るざるを得なかった。こうした政治的状況の中、イェスゲイは次の政権に対する野心を膨らませ、タタルと存分に戦うため、タタル出身の妻との正式な婚姻関係を反故にした。当然ながら、イェスゲイのこの行為はイェスゲイとタタル集団との関係を敵対的なものに変化させた。

イェスゲイから嫁を求められていたオルクヌウトにとっても、この集団を含むコンギラトのデイ・セチェンにとっても、イェスゲイのタタルに対しておこなった婚姻関係の破壊は他人事ではなかった。なぜなら、正妻として娶ったとしても、政治的な状況しだいで婚姻関係を反故にするような人物に自分の娘を嫁がせるというのは危険な賭けだからである。

そして、こうした事情からデイ・セチェンは密かにタタル集団と通じていた可能性があると考える。ここで通じていたというのは、デイ・セチェンがタタル集団にイェスゲイ親子が自分のところに嫁探しにやってきたことを知らせていたという意味である。つまり、イェスゲイの帰途に通過するチェクチェルという場所にタタルは陣取っていたのは偶然ではなく、デイ・セチェンからの情報によるものであったと考える。秘史の明示的流れにおいては、イェスゲイがデイ・セチェンに会ったのも、帰途にタタル集団の宴会に出くわしたのも偶然であるように書かれているが、非明示的には、両者とも計画的にイェスゲイを待ち伏せしていたということである。

デイ・セチェンがタタル集団と内通していたという仮説が示しているのは、イェスゲイが後のチンギスの実母となるホエルンを略奪して妻としたプロセスがモンゴル社会に与えた衝撃の大きさである―以前に論じたように既にイェスゲイには正妻がいたのでイェスゲイはホエルンを略奪という手段で奪うしかなかったのである―。デイ・セチェンはイェスゲイにコンギラト集団が皇帝の正妻を輩出してきた集団であることを滔々と述べているが、それほど正妻の地位は姻族にとって重要なことであった。この箇所についての詳細な考察は次の節で行うことにしたい。

２．２．３　デイ・セチェンによる「コンギラトの乙女が皇帝の正妻となってきた」という主張の非明示的意味

デイ・セチェンは自分の娘を所望するイェスゲイに、コンギラトの娘はあくまでも非正妻ではなく、皇帝の正妻であるべきだと主張している発話は巻 1§64 にある。短いので全文を引用しておこう（栗林均・确精扎布　2001：48，50）。

巻 1 §64
1 : ba Onggirat_irgen erte üdür-eče je'e-yin jisün ökin-ü önggeten
われらコンギラト人は昔より女人の麗しい容貌
2: ulus ülü temeče=t. qačar qo'a ökid-i qahan
乙女たちの麗しき容色で、相争うことはない。頬麗しい乙女たちを**皇帝**
3: bol=u=qsan-a tan-u qasaq tergen-tür unu'ul=ju qara
となった者に、黒い馬車に載せて、黒い
4: bu'ura kölge=jü qatara'ul=ju ot=ču qatun sa'urin-tur
ラクダをつけて駆けさせて、**后の座に**、
5: qamtu sa'ūl=u=mu. ba ulus irgen ülü temeče=t
ともに就けるのである。民は相争わず、
6 : ba öngge sayit ökid-iyen ösge=jü ölǰigetei tergen-tür
容色の優れた乙女を育てて前室のある車に
7:unu'ul=ju öle bu'ura kölge=jü e'üsge=jü ot=ču ündür
乗せて、灰青色のラクダにひかせて、高い
8: sa'urin-tur öre'ele etēt sa'ul=ḳui. ba erte-eče Onggirat
座に、傍らに就かせるのである。昔からコンギラト
9:_irgen qatun qalqatan ökit öčilten je'e-yin jisün ökin-ü
人は后の頬をした、乙女たちは付き人を持ち、女人の美しい容貌、乙女の
10: öngge-ber bü=le'e ba.
麗しい容色で存在している。

上記における 2－3 行目の qahan bol=u=qsan-a (皇帝になった者に)、4 行目の qatun sa'urin-tur（后の座に）、7－8 行目の ündür sa'urin-tur（高い座に）、9 行目の qatun qalqatan （后の頬をした）というように、コンギラト集団は后につく女性を輩出する集団であることが繰り返し主張されている。しかも、この后は乙女たちから后となることが強調されている—再婚といった婚姻ではないことが強調されている—。このことは、１行目、２行目、６行目、そして９行目における ökin（乙女の単数形）や ökid（乙女の複数形）が后と対比的に何度も用いられていることによって明らかである。デイ・セチェンはこのように繰り返すことによって、自分の娘ボルテをテムジンに嫁がせるのであれば、正妻以外ではありえないことを何度も言おうとしているのである。

デイ・セチェンの発話はコンギラト集団にはモンゴルの皇帝に嫁ぐ女人を輩出する集団であったことに注目されてきたが[9]、正妻／非正妻というような観点からみると、まったく異なるニュアンス

[9] 岡田英弘氏は秘史のデイ・セチェンのこの箇所における発言について、コンギラト集団が「平和的な」集団であるといった点や、「昔から」コンギラトの乙女たちが皇帝の正后になってきたことに着目して考察している（岡田　1985）。この論考においては、前者についてはこの縁談が成立したのがチンギスが 9 歳の時であることに基づき、チンギスの出生年については複数の説があることに触れられながらも、『元史』太祖本紀に従ってチンギスが死んだ年の丁亥（1227 年）時にチンギスが 66 歳であったとすると、当該エピソードの 9 歳は 1170 年であると計算している（岡田　1985：160）。そのうえで、当時のこの集団の情勢を『金史』九十三、宗浩列伝に基づき、十二世紀のコンギラト集団が「平和の伝統からほど遠く、外モンゴル東端に蟠踞して、境を接する金帝国の頭痛の種であったことは明らかである」としている（同：162）。後者については、コンギラトが皇帝の正后として定着しだしたのは、チンギスのモンゴル統一以前のことではなく、その孫フビライ・ハーンの登極以後のこの氏族のみ適合するものであるとしている（同：163）。すなわち、コンギラト—岡田論文ではフンギラト—の宮廷における外戚としての権勢の確立は、フビライ・ハーンの皇后チャブイ・ハトンの所生のチンキムが皇太子に選ばれ、チンキムの子孫から元の諸帝が輩出するようになってからのことであるという

を読み取らなければならない。すなわち、デイ・セチェンはイェスゲイ自身の婚姻に何度も比喩的に触れて、イェスゲイが信用ならない人物だと認識しているということをイェスゲイに比喩的に伝えようとしているのである。それだけでなく、デイ・セチェンはさらに踏み込んだ警告をイェスゲイに伝えようとしていた。その警告は上記に引用した詩句部分とは別の詩句で表現されている。この詩句は非常に謎めいたものであるが、本論のような観点から読み解くと理解可能なものになることを次の節で提示したい。

２．２．４　デイ・セチェンのイェスゲイに話した夢の内容の非明示的意味

デイ・セチェンのイェスゲイへの警告の詩句は巻１§63 にある。以下、この部分をすべて引用したい。ここにおいては、デイ・セチェンが自分の娘を見てもらうためにイェスゲイ親子を家に連れてきたときに、彼らに自分の見た夢の内容を話している（栗林均・确精扎布　2001：48）。

§63
1: Yisügei_quda bi ene söni ǰewüdün ǰewüdüle=be bi. čaqān šingqor
イェスゲイ・クダ（縁者）よ、私は、この夜、夢を見た。白い海青（おおたか）が、
2: naran sara qoyar-i atqu=n nis=ǰu ire=ǰü qar de’ere min-u tu’u=ba.
太陽と月との二つをつかんで飛来して、私の腕の上にとまった。
3: ene ǰewüdün-iyen gü’ün-e ügüle=rün〈naran sara-yi qara=ǰu üǰekde=n
この夢を人に語っていうには、「太陽と月は仰ぎ見られるもの
4:bü=le’e. edö’e ene šingqor atqu=ǰu abčira=ǰu
である。今、この海青が掴んできて
5:qar-tur min-u tu’u=ba. čaqān bawu=ba. yambar ele sayi üǰe
私の腕にとまった。白きものが降りたり。何か良いことを
6:’ül=ü=mü.〉ke’e=ǰü Yisügei_quda ene ǰewüdün min-u čima-yi
見せようとしているのであろうか」と。イェスゲイ・クダ（縁者）よ、この夢をあなたが
7: ele kö’ü-be’en udurit=ču ire=güy-e üǰe=ksen a=ǰu’u.
息子さんを連れてきたために見たようだ。
8: ǰewüdün sayin ǰewüdüle=be. ya’un ǰewüdün a=qu. ta Kiyat
良き夢を見た。どのような夢なのか。あなたたちキヤド
9:_irgen-ü sülder ire=ǰü ǰa’aqa=qsan a=ǰu’u.
人の吉兆がきたって告げたようである」と言った。

（同：165）。そしてその権勢は泰定帝のときまでだと考察している。それゆえ、氏によると、コンギラトが「その女子を后妃として奉ることによって宮廷において尊貴な地位を誇り得た期間は、厳密に言って、1273 年、成祖フビライ・ハーンがチャブイ・ハトンに皇后に玉冊を授けた時から、1328 年の泰定帝の死に至るまでの五十四年間に過ぎない」としている。氏は当該論文で秘史の成立年代（奥書にある子の年に書き終えたという記述）をこのコンギラトの問題と絡めて論じており、秘史の§274 のイェスデル・ホルチの高麗出征の年（1258 年）より後で、ケルレン河上のコデエ・アラルで開かれたクリルタイは 1323 年の泰定帝の即位の時しかないとしている。そして、奥書にある「書き終えた」としている年が子であることを鑑み、泰定帝の即位年は癸亥であるものの、翌年が甲子であることから、クリルタイがすでに集まって、次の年の子の年七月に書き終えたと解釈した（同：173）。氏の論は、元朝秘史の成立年代の最も遅い時期として注目されてきたが、本論では、イェスゲイ自身の婚姻についての隠喩であるという解釈を述べるため、岡田説は採らない。岡田氏や松田氏の論考は同じく『金史』巻 93 に拠っており、たしかに、そこにおいてはデイ・セチェンの属するボスフル或いはボルクルが 1198 年に金に降っていることを見ると、それ以前までは反金朝であったと考えられる。その観点から見ると、イェスゲイがアムバガイの遺志を継いで反タタル、反金朝になったことを論じた拙論と符合している（藤井　2015）。そして、反金朝なので、テムジンが９歳（1170 年）にイェスゲイが§61 でオルクヌウト―秘史では間接的にコンギラトと同族集団扱い―から息子テムジンの妻を求めようとしたということなのだと考えられる。

上記に引用した内容は明示的にはデイ・セチェンがイェスゲイ親子を歓迎しているかのような内容になっている。しかし、非明示的には全く異なる内容として解釈しうる。

まず指摘する必要があるのは、上記の４行目の šingqor atqu=ǰu abčira=ǰu の šingqor－傍訳に“海青”－の非明示的な意味である。šingqor は明示的には大鷹のことを指しているが、šingqor は非明示的に šing（新）と qor（毒）に分節し、“新しい毒”の意に解することができる。すなわち、前半の音節を漢語として、後半の音節をモンゴル語で理解することができる。一見こじつけのように見えるかもしれないが、デイ・セチェンの名前そのものが、漢語の“大”を意味するデイとセチェンすなわちモンゴル語の“賢者”で 構成されていることを考えると、この解釈はありうるものである。デイ・セチェンは新しい毒を開発したのか、あるいは入手したのかはわからないが、上記に引用した一連の詩句で自分が新しい毒を持っていることをイェスゲイに比喩的に伝えているのである。

§63 はほぼすべての語が隠喩（非明示的内容）となっているので、下記においては適宜区切りつつ確認していきたい。まず、１－４行目である。重要なので繰り返すと、以下のようになる。

1: Yisügei_quda bi ene söni ǰewüdün ǰewüdüle=be bi. čaqān šingqor
イェスゲイ・クダ（縁者）よ、私は、この夜、夢を見た。白い海青（おおたか）が、
2: naran sara qoyar-i atqu=n nis=ǰu ire=ǰü qar de’ere min-u tu’u=ba.
太陽と月との二つをつかんで飛んできて、私の腕の上にとまった。
3: ene ǰewüdün-iyen gü’ün-e ügüle=rün 〈naran sara-yi qara=ǰu üǰekde=n
この夢を人に語っていうには、「太陽と月は仰ぎ見られるもの
4:bü=le’e.…
である。

デイ・セチェンは明示的には大鷹が太陽と月とを掴んで自分の腕にとまったことを言っているが、非明示的には“新薬”に言及しているものと解釈できる。2行目の「太陽と月の二つをつかんで」というのは、物理的物体としての太陽や月のことではなく、太陽の出ている時間帯や月の出ている時間帯のことを隠喩的に指しているものと思われる。すなわち“昼夜”のことを指しており、その意味は“二十四時間、常時”という意味である。つまり、この部分は、「自分の手には新薬があり、いつでも使える状態にある」ということを意味しているのである。太陽や月が物理的存在の意味を明示的に指しながらも隠喩的に昼夜の時間帯のことを指していることは、後続の 3－4 行目の箇所からもうかがえる。

3: ene ǰewüdün-iyen gü’ün-e ügüle=rün 〈naran sara-yi qara=ǰu üǰekde=n
この夢を人に語っていうには、「太陽と月は仰ぎ見られるもの
4:bü=le’e.　edö’e ene šingqor atqu=ǰu abčira=ǰu
である。今、この海青が掴んできて
5:qar-tur min-u tu’u=ba. …
私の腕にとまった。…

3 行目の「太陽と月は仰ぎ見られるもの」というのは物理的な太陽と月のことを指しているのであるが、隠喩的には物理的な意味で解さないように、「仰ぎ見られる太陽と月なのに、海青（大鷹）がつかんできた」と述べるのである。これとは別に、§63 で叙述されているデイ・セチェンの夢は明示的には吉兆として解釈されているが、隠喩としては“新薬”を用いることに言及してるわけであるから不吉そのものである。この夢が通常の夢でないことは 3 行目に出てくる「夢」をデイ・セチェンが他者に語っていたことからも暗示されている。なぜならモンゴルの慣習においては良い夢は他人に語らないからである。それゆえ、このデイ・セチェンの夢を他者に伝えていたという行為からも、当該節で叙述されている事柄を吉兆として読み取るべきではないことが示されているといえ

る[10]。

さらに、この太陽と月が時間帯を表すことは次の 5 行目後半部分で傍証されているように思われる。5 行目を繰り返すと次のようになる。

5:… čaqān bawu=ba.
白きものが降りたり。

この文は曖昧模糊ととしているが、従来、大鷹の白さを意味しているものとして理解されてきたといえる。すなわち、明示的には白い海青（大鷹）が地上に着地したことを指しているが、この部分の隠喩としては、čaqān（白）ではなく、čaq　ni　(その時が)と読むべきであろう。すなわち「好機が到来した」という意味で解したい。そもそも、鳥の色も種類もすでにはっきりしていて、前文に「白い海青（大鷹）」と述べているのに、すぐ後続する文で同じものを「白いもの」と曖昧にする必要はない。おそらく“新薬”の色に“白”という形容詞が付されたのは、この「白きものが降りたり」の「白いもの」が明示的な鷹の白さを示す以外にも、隠喩を隠蔽するためにも用いられたのだと考える。そして、次の 5－7 行目においては、なぜこの新薬を用いようとしているのかが隠喩的に説明されている。

5:…yambar ele sayi üje
…何か良いことを
6:’ül=ü=mü.〉ke’e=jü Yisügei_quda ene jewüdün min-u čima-yi
見せようとしているのであろうか」と。イェスゲイ・クダ（縁者）よ、この夢をあなたが
7: ele kö’ü-be’en udurit=ču ire=güy-e üje=ksen a=ju’u.
息子さんを連れてきたために見たようだ。

上記を隠喩的に読み解けば、デイ・セチェンがこの“新薬”を用いようとする理由はイェスゲイが息子テムジンを連れてきたことにあるとしている。すなわち、イェスゲイが厚顔無恥にもホエルンの正式な婚姻を壊しておきながら、ホエルンの所属する集団から自分の息子の妻を探そうとしていることにあると言っているのだと理解できる。上記に述べた解釈の妥当性を補強している点で、この部分は重要な箇所といえる。

8: jewüdün sayin jewüdüle=be. ya’un jewüdün a=qu. ta Kiyat
良き夢を見た。どのような夢なのか。あなたたちキヤド
9:_irgen-ü sülder ire=jü ja’aqa=qsan a=ju’u.
人の吉兆がきたって告げたようである」と言った。

ここでデイ・セチェンは自分の見た夢すなわち、これから行おうとしていること（イェスゲイに毒を盛ること）を肯定していることを表している。明示的には、デイ・セチェンはイェスゲイをクダ（縁者）と終始呼びかけていることから、イェスゲイ親子を歓迎しているように見えるが、隠喩的には逆で、内心は穏やかではないのである。最終行の 9 行目の sülder は「吉兆」の意味として解されているが、隠喩としては süld と er に分けて解するべきところであろう。すなわち、süld は「霊威ある、超人的な、普通ではない」、er は「男性」である。語感としては「尋常の感覚では理解不能の人物」ということになろう。すなわちこの部分は「あなたたちキヤト人の尋常の感覚では理解できない人がやってきたようである」と比喩的に読むことになる。

２．２．５　犬の隠喩

ところで、デイ・セチェンはこの毒を自分でイェスゲイに盛ったのであろうか。これについては

[10] 注 4 を参照。

明確なことはわからない。しかし、イェスゲイが当該節から４節後の§67 において述べられていることに基づくと、１）タタルの宴会に立ち寄った原因が喉の渇きであったこと、そして２）タタルの宴会で盛られた毒が致死量であったにも関わらず徐々に効果を及ぼすような性質のものであった。この１）と２）を考慮に入れると、デイ・セチェンは少量用いた可能性は否めない。そのタイミングはおそらくイェスゲイがデイ・セチェンの家に泊まった次の日の出発前に二人が交わした会話のすぐあとではないかと推測される。なぜなら、イェスゲイはテムジンをデイ・セチェンのもとに婿として置いていくときに、テムジンが犬を怖がるので怖がらせないようにデイ・セチェンに依頼しているからである。モンゴルにおける遊牧社会において犬は家を守るものであるので、象徴的には正妻の意味を帯びている。“正妻”との縁を結ぶためにやってきたにも関わらず、その“正妻”に自分の息子を怖れさせないようにしてくれとデイ・セチェンに依頼していることになる。

秘史における犬が隠喩的にどういう意味を持つのかということは今後詳細に考察すべき事柄であるが、犬の象徴的意味のひとつに“正妻”の意味があることは秘史の別の場面から推測されうることを指摘しておきたい。それは、ケレイトの王罕が殺された後、王罕の息子であるセングムが彼に仕えていた馬司ココチュとそのの妻と３人で砂漠に水を求めていたことが叙述されている場面である（巻 7§188）。そこにおいては、セングムの馬司ココチュはセングムの馬を引き連れていたが、その馬に乗って走り去ってしまう。この夫の主君に対する背信行為をみたココチュの妻は夫を咎めセングムのもとに残る。この妻の行動に対して、ココチュはセングムの妻になろうとしているのかと非難する。ココチュの妻は夫の非難に対して「女人は犬の面皮をもつと言われている」と答える。この言葉は犬の忠実性を比喩的に表している言葉であるが（小沢　1997 下巻：35）、夫に忠実である妻の意味も示している。

イェスゲイに話を戻す。犬が隠喩として何を表すかに思いを馳せなかったことを見ても、イェスゲイが象徴的言語を解することができなかった人物であったことは明らかである。だからこそ、息子テムジンが現実の犬を怖がることを躊躇なく口にできたわけである。しかし、高次の象徴的言語を操るデイ・セチェンはイェスゲイの犬についての発言を聞いて、イェスゲイをますます信用ならない人物だという判断を下した。イェスゲイの言動は悉くデイ・セチェンの不信を掻き立てるものであったことは間違いない。

イェスゲイが帰途、タタル集団が待ち伏せをしているチェグチェルで喉が渇いて下馬せざるを得なくなったことも偶然でないと考えると、デイ・セチェンがイェスゲイに毒を盛った可能性は高いといえる。そして、とどめを刺すかのように、イェスゲイはタタルの宴会において致死量の毒を盛られたということになる。ただ、その毒は徐々に効力を発揮する“新薬”であったため、イェスゲイは帰宅後に重篤化して、最終的に命を落とすことになった。つまり、イェスゲイ殺しは明示的には悪意あるタタル集団によるものであるように書かれているが、非明示的にはデイ・セチェンとタタル集団との結託によってなされたものだということになる。両者のこの恐るべき結託はしかし、モンゴル社会における婚姻秩序を脅かす存在に対する社会的制裁という意味をもっていたといえる。

むろんイェスゲイも帰宅後に事の真相を悟ったのであろう。これは、イェスゲイが臨終のさいにテムジンをデイ・セチェンのもとから連れ戻すように遺言を残したことから充分に推測されるところである。

２．３　小括

以上の考察から、最初の目的に述べた不可解な点はすべて解けたことになる。３つの点についてそれぞれまとめておきたい。

①イェスゲイがデイ・セチェンのもとからの帰途にタタル集団の宴会で毒を盛られ、家路についた後、遺言としてムンリクにデイ・セチェンのもとからテムジンを連れ戻すように指示していることについて。

これまでの考察に基づくと、イェスゲイはデイ・セチェンの裏切りにより落命しようとしているのであるから、テムジンをデイ・セチェンのもとから連れ戻そうとするのは当然の行為であろう。

②ムンリクがデイ・セチェンのところに行ってテムジンを連れ戻すのであるが、その際にデイ・セチェンには虚偽の理由を述べてテムジンを連れ戻していることについて。

①と連動して、ムンリクはイェスゲイの使者としてイェスゲイを罠に陥れたデイ・セチェンを警戒して真実を言わなかったと考えられる。
③デイ・セチェンがイェスゲイ親子に出会うことを予知した夢をデイ・セチェンが「吉兆」としてイェスゲイに語っていることについて。
デイ・セチェンの夢はイェスゲイに盛る毒をいつでも用いる用意があることを隠喩的に伝えたものであるので吉兆ではない。それゆえ、他者に語っているのはモンゴルの慣習には反しないことになる。

３．考察その２－区分Ｂの考察－

３．１　§94 の概要

ここでは表１の区分 B についての考察をおこなうことにしたい。区分 B の 4 例はすべて巻２§94 に集中している。この§94 の内容を端的に示すならば、チンギスがデイ・セチェンのもとを訪ねてボルテを妻として娶るという内容となる。デイ・セチェンがイェスゲイ殺害に関与したという本論の仮説に基づくと、チンギスは自分の父を殺害した事件に関与した人間（デイ・セチェン）のもとにその人物の実の娘（ボルテ）を妻として娶りに行っているということになるのであるから、その行為は不可解極まるものに映る。
しかし、イェスゲイがそもそも殺害された背景においては、イェスゲイの無理筋ともいえる所業―正妻を“ベルグテイの母”からホエルンへと取り換えたという所業―にあった（藤井　2010，2011）。それゆえ、イェスゲイの二の舞にならないように、チンギスは父イェスゲイとデイ・セチェンの間でまとめられた縁談を正式なものとして受け入れることにしたということなのだと考える。この婚姻でデイ・セチェンは途中までしか娘ボルテを見送らず、ボルテの母がチンギスの家まで娘を見送り、チンギス側から危害を加えられることもなく無事に帰宅している。この観点から眺めると、デイ・セチェンはアムバガイの遺言で指示した慣習のために命拾いしたということになる（巻１§53）。
とはいえ、ボルテの母が結納としてもってきたクロテンのコートはチンギスがその後すぐにケレイトの王罕と懇意になるための貢物として利用されており、チンギスにとってクロテンのコートを得るためにボルテと結婚したかのような叙述の流れになっていると言えなくもない。この場合、本論の仮説に基づけば、チンギスが父親イェスゲイを殺された代償として、父の仇であるデイ・セチェンから貰ったクロテンのコートを政治利用することに良心の呵責を覚えなかったことは不思議ではない[11]。
まず問題の§94 の全文を以下に引用しておきたい（栗林均・确精扎布 2001：90）。下記の邦訳の中の①～⑤のゴシック体の部分は筆者によるものであるが、番号は下記の考察で述べる順序で付してあることを断っておく。

§94
１（02:36:06）tende-če Temüǰin Be[l]gütei qoyar **Dei_sečen**-nü Börte_üǰin-i
それより、テムジン、⑤ベルグテイの２人はデイ・セチェンのボルテ婦人を
２（02:36:07）yisün nasutu bü=küi-ṭür üǰe=ǰü ire=kse’er qaqača=ǰu bü=le’e.
④９歳のときに会ってから以後ずっと離れていた。
3（02:36:08）Kelüren_müren huru’u eri=n ot=ba. Če[k]čer Čiqurqu qoyar-un
ケルレン河を下って探しに行った。②チェクチェル、チクルク両山の
4（02 :36 :09）ǰa’ura **Dei_sečen** Onggira[t] tende a=ǰu’u. **Dei_sečen** Temüǰin-i
間にデイ・セチェンのコンギラト集団はそこにいた。①デイ・セチェンはテムジンを

[11] さらに、チンギスがイェスゲイ亡きあとにジャムカに奪われた領民を取り戻すためにボルテをメルキトに奪わせたという仮説を提起した拙論もまたデイ・セチェンによるイェスゲイ事件への関与と符合する行動である（藤井　2014：53，2018：7－10）。

5（02 :36 :10）üje-jü maši yeke bayas_ču ügüle_rün ≪Tayyiči'ut_aqa_de'ü
見て大いに喜んで言うのに、③「タイチウト兄弟が
6（02 :37 :01）　čin-u naita=mu ke'e=n mede=jü maši herü=jü čökö=le'ei. aran
妬んでいると知って、たいそう心を痛めていたぞ。やっと
7（02 :37 :02）　üje=be je čima-yi. ≫ k ē =et Börte_üjin-i neyile'üle=et
会えたぞ、お前に」と言って、ボルテ婦人を一緒にさせて
8（02 :37 :03）　e'üsge=be. e'üsge=n ayisu=run **Dei_sečen** ja'ura Kelüren-ü
発たせた。発たせてきて、デイ・セチェンが途中、ケルレン河の
9（02 :37 :04）　Uraq_Čöl nū-dača qari=ba. gergei in-u Börte_üjin-ü eke
ウラグ・チョル湿原から帰った。彼の妻ボルテ婦人の母は
10 （02:37:05 ）Čotan neretei bü=liyi. Čotan öki-yen hüde=jü Gürelgü
チョタンという名前をもっていた。チョタンは娘を送ってグレルグ山の
11（02 :37 :06 ）dotora Senggür_qoroqan-a　bü=küi-ṭür gürge=jü ire=be
山中に、センゲル川にいるときに送り届けてきた。

①について（4－5 行目）デイ・セチェンはテムジンを見て大いに喜んで

まずデイ・セチェンはテムジンが自分の娘を娶りにきたことを歓迎したということはありないであろう。むしろ、デイ・セチェンはテムジンが娘を娶りにきたことに驚愕したはずである。そのような観点からもうこの部分を見ると、maši yeke bayas_ču （大いに喜んで）という表現は注目すべき表現である。秘史には現代モンゴル語－ここでは主にハルハ方言のことを念頭においているが—では用いられない語や表現が多いが、この表現は現代においても使われなくもない表現である[12]。なぜなら、この場合、maši yeke bayas_ču は「おおいに喜んで」とやや意訳してあるが、ここでの喜び具合はかなり過剰な喜び方になっているからである。具体的に言えば、喜びの度合いとしては段階的に bayas_ču （喜んで）→yeke bayas_ču （たいへん喜んで）→maši yeke bayas_ču （直訳すると、「非常にたいへん喜んで」）となって、秘史においては最上級的な喜び具合になっている。３番目の形にみえる maši は yeke を強調する副詞なので、2 番目の「たいへん喜んで」よりも喜びの度合いがさらに強くなる。つまり、こうした過剰な喜び具合はデイ・セチェンが自分の娘を娶りに来たテムジンに動揺していることを非明示的に示しているのだと解釈できるのである。

②について（3－4 行目）チェクチェル、チクルク両山の間に

上記の①と連動して、デイ・セチェンがテムジンの出現にいかに動揺したかは、この部分でデイ・セチェンの居住地が「チェクチェルとチクルクの間」にあったことが示している。この居住地は、デイ・セチェンとイェスゲイが出逢った場所であり、イェスゲイ横死事件の後、デイ・セチェンは自分の居住地を変えることもなく居住していたことを示唆している。つまり、デイ・セチェンは当時のテムジンの置かれていた状況からして意趣返しされることは想定しておらず、ましてやテムジンが自分のもとに来ることは想定していなかったと思われる。

③について（5－6 行目）：その１「タイチウト兄弟が妬んでいると知って、たいそう心を痛めていたぞ」

デイ・セチェンはテムジンが自分のもとに来ることは想定しなかったものの、テムジン一家の情勢については掴んでいたことがこの部分からうかがわれる。しかし、この言葉はデイ・セチェンがイェスゲイ事件に関わっていなければ、奇妙な言葉としか言いようがない。なぜなら、デイ・セチェンがテムジンと会うのはイェスゲイ事件後初めてであるのだから、デイ・セチェンはテムジンが

[12] 本学でモンゴル語を教授されているニャムバヤル氏によると、ハルハでは口語においては「喜ぶ」という意味の動詞は баярлах を用いるのが普通で、秘史の баясах は文語で用いるという。とはいえ、баясах の他動詞形である　баясгах は「子供や老人を喜ばす」というような場合には口語でも用いることがあるという。

タイチウド集団と揉めていることよりも、まずはイェスゲイの死を悼む言葉をテムジンにかけるべきではなかったかと思われるからである。

この場合、デイ・セチェンがイェスゲイの死に言及しないのはデイ・セチェンがあえて言及を避けたからであり、その理由はまさにデイ・セチェンがイェスゲイの死に関与したことを傍証しているように思われる。

③について（5－6 行目）：その２「タイチウト兄弟が妬んでいると知って、たいそう心を痛めていたぞ」

上記と関連して指摘すべきことは、デイ・セチェンの「タイチウト兄弟が妬んでいると知って、たいそう心を痛めていたぞ」という言葉が真実ではないことである。なぜなら、テムジンがまさにタイチウド集団に虐待されていたときに、デイ・セチェンはそれを知っていたにも関わらず―デイ・セチェン自身が表明している―、何もした形跡がないからである。テムジンが将来の婿であるにもかかわらずである。デイ（大）・セチェン（賢者）であるにも関わらず、デイ・セチェンの言葉は矛盾に満ちている。これは彼がテムジンの来訪を全く予期していなかったことと関係しており、彼の動揺の大きさをうかがわせている。

④について（2 行目）９歳のときに会ってから以後ずっと離れていた

この部分は上記の③についての考察の前提となるもので、テムジンがデイ・セチェンと会ったのが、イェスゲイとデイ・セチェンとの間で彼らの息子と娘の縁談が成立していた以来のことであることを示した箇所である。

⑤について（１行目）ベルグテイ

ベルグテイはタタル出身と考えられる“ベルグテイの母”の息子であるから、テムジンがベルグテイを連れてボルテを迎えに行ったことは隠喩的には大きな意味を持つ。なぜなら、そもそもデイ・セチェンがイェスゲイ横死事件に関与したのは、イェスゲイが正妻であった“ベルグテイの母”を正妻の座から降格させたからである。それゆえ、その息子のベルグテイがテムジンに付き従っていることはベルグテイよりもテムジンが力を持っていることを示している。つまり、ベルグテイ自身が“ベルグテイの母”へのイェスゲイの仕打ちを受け入れているということを暗示していることになる。ベルグテイ本人が自分の母の運命を受け入れているのであれば、他人であるデイ・セチェンがイェスゲイの殺害に関与する必要は全くなかったことを示しているのである。デイ・セチェンはテムジンが自分を来訪したことにも驚いたはずであるが、その同伴者がベルグテイであったことにも衝撃を受けたはずである。

以上の考察から、区分 A においてはイェスゲイはデイ・セチェンの言動に一方的に負かされているが、この区分 B においては逆にデイ・セチェンがイェスゲイの息子テムジンの突然の来訪に周章狼狽している様が看て取れる。

３．２　小括

以上をまとめると次のようになる。まず、区分 B にはデイ・セチェンの名前に 4 度触れられている章である§94 の内容を検討した。§94 の内容は明示的レベルにおいては、２．で検討したデイ・セチェンがイェスゲイ事件に関与した人物であるという仮説とは相容れない好人物の振る舞いをしているものの、非明示的なレベルにおいては仮説に沿った振舞い方をしていることが明らかなったといえる。

①～⑤の考察でとくに重要だと思われるのは④の内容を前提にしてデイ・セチェンがテムジンに言った言葉「タイチウト兄弟が妬んでいると知って、たいそう心を痛めていたぞ」という③についての２つの考察である。なぜなら、この発言はイェスゲイの横死以来初めて交わすデイ・セチェン

とテムジンの再会時の会話であるにも関わらず、１）デイ・セチェンがイェスゲイの死に一切言及していないこと、２）デイ・セチェンがテムジンの苦境についての情報を得ていたにも関わらずテムジンに何ら援助していなかったことの２つの重大な事実を露呈していることになるからである。このことは、デイ・セチェンがイェスゲイ横死に関与していた本論の仮説と符合している。

４．結論

本論ではデイ・セチェンが非明示的なレベルにおいてはイェスゲイの敵でありイェスゲイに毒を盛ったタタル集団と内通していたという仮説を提起した。最後に、デイ・セチェンとタタル集団とは明示的に接点が何も示されていないことを踏まえ、そのあたりの事情を再度説明しておきたい。

この経緯を説明するにはイェスゲイ自身の婚姻の話に戻る必要がある。イェスゲイの正妻は非明示的なレベルでは‘ベルグテイの母’であった（藤井　2010，2011）。しかし、政変が起き、アムバガイ・カアンがタタル集団の裏切りにより殺害された。アムバガイ配下にあったイェスゲイはタタル集団と闘わなくてはならなくなった。しかし、当時イェスゲイの正妻はタタル出身であった。正妻の出自により、イェスゲイは政治的に不利な状況に陥った。と同時に彼には次の政権を取る野望も生じていた（藤井　2015）。そこでイェスゲイはタタルの出身であったこの女性を正妻の座から降格させ、代わりにホエルンを奪い正妻にした。ホエルンは後にテムジンの母となる女性である。ホエルンが略奪という方法でイェスゲイの妻となった背景には、すでに正妻がいたため慣習的な方法でホエルンを正妻にすることができなかった事情がある。しかし、イェスゲイが正妻をすげ替える行為は草原社会の婚姻秩序に対する挑戦ともいえた。イェスゲイがホエルンを正妻にした約 10 年後、イェスゲイは妻ホエルンの属する集団から息子テムジンの妻を求めようと出かけた。ホエルンの集団オルクヌウトは同族のコンギラト集団の長老的存在であるデイ・セチェンに相談した。イェスゲイは政治的状況が変わると正妻を降格させるような人物であるため（正妻という立場がいかに重要であるかは本論の２．２．３で詳細に論じたとおりである）、オルクヌウト側は縁談には消極的であったと想像される。こうして、タタルとオルクヌウト／コンギラトの間には共通点が生まれた。

以上のような経緯の結果、デイ・セチェンはタタル集団と共謀し、イェスゲイを殺害することにした。イェスゲイはオルクヌウトに向かう途上でデイ・セチェンと偶然遭遇したように書かれてあるが、デイ・セチェンは事前にオルクヌウトからの情報でイェスゲイを待ち伏せしていたのである。本論の２．２．４で詳細に論じたように、デイ・セチェンは隠喩によってイェスゲイに‘新薬’がいつでも使える状態にあるという警告を発したものの、イェスゲイはその警告の意味を読み取ることができなかった。タタル集団がイェスゲイに盛った毒がデイ・セチェンの毒と同じものであったかどうかはわからない。いずれにしても、イェスゲイがデイ・セチェンからの帰途にタタルの宴会と遭遇したのも偶然ではなかった。彼らはデイ・セチェンからの情報により、イェスゲイに毒を盛ろうとイェスゲイの帰路で待ち構えていたのである。

以上が、イェスゲイ横死事件の全貌をカバーする非明示的読み取りである。以上をふまえると、明示的に不可解であった１）イェスゲイが危篤のさいにムンリクにデイ・セチェンのもとからテムジンを早く取り戻すように命じていること、２）ムンリクがデイ・セチェンに虚偽の理由を述べてテムジンを連れ帰っていることは当然のことだと理解できる。そして３）デイ・セチェンがイェスゲイに告げる夢の話は非明示的には‘新薬’をいつでも使える状態にあることを伝えようとしていた不吉な話であったことを考えると、デイ・セチェンが他者に話していたのはモンゴルの慣習に反するものではなかったと結論することができる。

引用文献

【日本語】
岡田英弘（1985）「元朝秘史の成立」『東洋學報』第 66 巻　創立 60 周年記念特輯號　157－177 頁
小澤重男（1984－1986）『元朝秘史全釈』（上）（中）（下）　風間書房
小澤重男（1987－1989）『元朝秘史全釈続攷』（上）（中）（下）　風間書房

小沢重男（1997）『元朝秘史』上・下巻，岩波文庫
栗林均・确精扎布編（2001）『元朝秘史』モンゴル語全単語・語尾索引』東北アジア研究センター叢書第 4 号 東北大学
藤井麻湖〔＝藤井真湖〕（1998）　『伝承の喪失と構造分析の行方－モンゴル英雄叙事詩の隠された主人公』日本エディタースクール出版部
藤井麻湖〔＝藤井真湖〕（2001）『モンゴル英雄叙事詩の構造研究』風響社
藤井真湖（2010）「『元朝秘史』第 53 節～第 68 節の有機的解釈の試み―“ベルグテイの母”の出自の仮説をもとに―」『言語文化学会論集』第 34 号，167-179 頁
藤井真湖（2011）「『元朝秘史』におけるベクテル、ベルクテイ、“ベルグテイの母”の考察－ベルグテイの母の出身仮説をもとに―」『愛知淑徳大学現代社会研究科論集』第 6 号　21－41 頁
藤井真湖（2013）「『元朝秘史』の“モンゴル英雄叙事詩”的研究－現代に残る伝説から『元朝秘史』の物語分析へ」『千葉大学　ユーラシア言語文化論集』15，43－70 頁
藤井真湖（2014）「『元朝秘史』におけるボルテ事件―繰り返し現れる“略奪”と“奪還”の諸事件のクライマックスとして―」『愛知淑徳大学論集－グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科篇』第 6 号　39-54 頁
藤井真湖（2015）「『元朝秘史』におけるアムバガイ事件―クトゥラ関与の仮説に基づいて―」『愛知淑徳大学論集－グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科篇』第 7 号　11-32 頁
藤井真湖（2018）「『元朝秘史』におけるホエルン夫人の隠された再婚―繰り返された再婚とその破綻の仮説―」『愛知淑徳大学論集－グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科篇』第 8 号　1-22 頁
藤井真湖（2020）「『元朝秘史』におけるカアタイ・ダルマラ―ホエルンとチレドの実子であったという仮説に基づいて―」『愛知淑徳大学論集－グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科篇』第 12 号　29-54 頁
村上正二（1970）『モンゴル秘史 1　チンギス・カン物語』東洋文庫　平凡社
松田孝一（2006）「セルベン・ハールガ漢字銘文とオルジャ河の戦い」白石典之［編］（2006）『モンゴル国所在の金代碑文遺跡の研究』（平成 17 ～ 18 年度科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書）新潟: 新潟大学　28-50 頁
ロラン・バルト（1979〔原文は 1977〕）「物語の構造分析序説」『物語の構造分析』（花輪光訳）みすず書房
【英語】
Fujii，Mako（2019）Alan_Qo’a’ s Episode in the *Secret History of the Mongols* Reconsidered: Focusing on group-formation created as a result of discord among Alan_Qo’a’s sons，The 2nd Annual International Conference on Traditional Cultures along the Silk Roads, Conference Proceeding, August 26-28, 2019.
【モンゴル語】
Чоймаа,Ш. 2002　Монголын Нууц Товчоон, Лувсанданзаны Алтан Товч Эхийн харьцуулсан судалгаа Улаанбаатар
【ロシア語】
Владимирцов,Б.Я.
1971　Монголо-Ойратский героический эпос. Пб.-М.〔Original text was published in 1923〕